doi：10. 20776/S13482084-70-P377
千葉大学教育学部研究紀要　第70巻　377～385頁（2022）

図画工作科に関する校内研修について
―小学校教員の実態調査―

久保田美和[1)]・小橋暁子[2)]*
[1)]千葉市立幕張南小学校
[2)]千葉大学・教育学部

Proposal for in-School Training on Art Education
―A Fact-finding Survey of Elementary School Teachers―

KUBOTA Miwa[1)] and KOBASHI Satoko[2)]*
[1)]Makuhari Minami Elementary School, Chiba City, Chiba Prefecture, Japan
[2)]Faculty of Education, Chiba University, Japan

OECDの国際教員指導環境調査（TALIS2018）の教員の現状と課題では教員の仕事時間は小中学校ともに参加国中で最長であるが，職能開発に費やす時間は参加国中で最短と報告されている。現状を具体的に把握するため地域や学校を抽出し，小学校教員の教科指導，とりわけ図画工作についての実態把握のため実施した質問紙調査の整理・分析を行った。調査から教員の教科指導の得手不得手，また授業での困り感や校内研修内容への希望の多様さ等がみられた。特に図画工作の教科に関する研修については，校内研修の役割が抽出した地域では大きいことが分かった。今回の結果を受けて教員の実態にあった校内研修のプログラムづくりにつなげていくための一助としたい。

キーワード：小学校（Elementary school），校内研修（In-school training），図画工作（Art education），
質問紙調査（Questionnaire survey）

1．はじめに

OECDの国際教員指導環境調査TALIS2018の令和元年の結果報告の教員の現状と課題[1)]によると教員の１週間あたりの仕事時間は小中学校ともに参加国中で最長であるが，職能開発（教員としての技能，知識，専門性その他の資質を高めるための活動）に費やす時間は参加国中で最短となっている[2)]。

全体の統計だけではなく，具体的なところでも近年は教員の多忙化，学校内での必要教員数の不足等から，教員が学校外へ出かけて研究会へ参加したり，時間をかけて研究や提案することが難しくなったりしている実態がある。しかしTALIS2018報告からは教員の職能開発へのニーズは高い[3)]。

教員の学びたい意欲を保障していくためにはどのような方策をとることができるか。そのことを考えるためにも，教員の具体的な実態把握は急務であると考える。本稿では教員にとって身近である校内研修に焦点を当て，特に図画工作に関しての教員の実態把握と研修への希望を中心に調査を行っていく。

2．目　　的

本稿では一部地域や学校を抽出し，小学校教員の教科指導，とりわけ図画工作の指導について把握するため実施した質問紙調査の整理・分析を行う。それらを考察することで，今後，教員の実態にあった校内研修のプログラムづくりにつなげられるのではないかと考える。

3．方　　法

久保田が2016年において一部地域の小学校教員対象に行った教科の指導や図画工作に対する傾向を知るための調査の整理及び分析を行う（基礎調査）。またその調査をもとに，具体的な校内研修の内容検討を行うため，一つの学校を抽出し，質問紙調査をもとに実態把握を行う（個別調査）。

調査のために抽出した地域や学校，対象者は本稿執筆者らが今後も継続的に調査が可能な範囲である。調査への回答は本人の意思に基づいて，個人情報保護のもと原則無記名により回収したものである。

4．教員の研修について

1）TALIS2018より

はじめにでも述べたが，日本の教員の職能開発に費やす時間は，その仕事時間に比例せず最短となっている。

小学校は参考値ではあるが，教員の職能開発へのニーズは調査項目「担当教科等の分野の指導法に関する能力」「担当教科等の分野に関する知識と理解」「特別な支援を要する児童生徒への指導」「個に応じた学習手法」「児童生徒の行動と学級経営」「児童生徒の評価方法」「指導用のICT技能」全てにおいて数値が平均を大幅に超えるほど高い[4)]。ニーズは高い一方で，その参加への障壁に

*連絡先著者：小橋暁子　kobashi-s@faculty.chiba-u.jp

ついては「職能開発の日程が自分の仕事のスケジュールと合わない」「家庭でやらなくてはならないことがあるため，時間が割けない」との回答がそれぞれ８割，７割を超えている[5)]。

実際に行っている職能開発の形態については「専門的な文書や書物を読むこと」「他校の見学」の割合が７割を超える一方，１割に満たない形態もある[6)]。

TALIS2018は文部科学省他により令和元年に続き，令和２年に教員へのフィードバック，教員・校長のストレスについてがvol. 2として報告された[7)]。そこでのフィードバックとは「教員の仕事に対する何らかの関与（例：授業観察，指導計画や児童生徒の成績に関する議論）に基づいて行われ，教員の指導に関するコミュニケーションとして，広く定義する。非公式な話し合い，あるいは公的で組織的な手法のいずれによっても行われる場合がある。」[8)]と示されている。特に良い影響を与えた内容としては「担当教科等の指導法に関する能力」「主な担当教科等の分野に関する知識と理解」についての項目が小･中学校共に高く，小学校は８割弱の高い結果となっている。また日本の小・中学校の特徴としては特に同僚教員とのフィードバックが参加国平均値よりも高く「日頃から共に学び合い，指導の改善につなげている。」[9)]と考察されている。また日本の小学校では特に校内の教員同士の会議や話し合い，学級や学年を超えた合同学習等協働的なかかわり方が高い割合でみられた[10)]。

そのような背景からも校内研修を中心に教科内容について検討することは日本の小学校の現状とも合うのではないかと考える。

２）校内研修

法律では教育基本法第九条[11)]，教育公務員特例法第二十一条[12)]に「絶えず研究と修養に」と記載があり，教員自身がその職に就いている中で学び続けることは法律でも求められている。なお研修については「自己研修」「校内研修」「校外研修」と大別されている[13)]。

校内研修の課題としては「校内研修体制の整備」「適切な研修計画の作成と時間の確保」「OJT（仕事を通した研修）の意識付けと校内集合研修等との関連」「メンター方式の研修の推進」「校内研修と校外研修との関連」「効果的な研修方法の工夫改善」が出されている[14)]。

また企画実施の際には，国の動向，各自治体や学校の教育課題，教員育成指標をふまえた企画やニーズや現状の把握が述べられている。研修の目的には「知識・理念・概念等の理解」「技能・スキル等の習得」「態度・行動等の変容」「問題解決能力の向上」が挙げられている[15)]。

３）実際

研修会と教員の実態との関係について，久保田が2020年に発表した「人材育成をとおした組織力向上における教頭の役割～OJTを通じて日常的に学び合う校内研修を目指して～」[16)]でのＡ市の実態記録と研修に関する調査資料をもとに以下に記載する。

久保田（2020）は，Ａ市において若手教職員の増加及び教職員の資質向上が課題であると指摘し，ミドルリーダーの育成やベテラン層の意欲の喚起等，キャリアに応じた人材育成が急務であることを背景に研修の調査を行った。

調査はＡ市Ｂ地区の18の小学校において教職員（424名）に，教職最初の５年間で必要だと思う研修について自由記述で質問紙調査を行ったところ，指導技術，授業実践，問題行動への対応，コミュニケーション力等が挙げられた。

Ａ市の多くの学校で校内研修は，通常校内の教務主任または研究主任等が校内教員らの希望聴取や，管理職などからの要望，市から依頼などをもとに計画を行う。時間数は学校ごとに異なり，公開研究会等があると多くなる傾向がある。時数としては月１，２回（勤務時間内／50分程度）が多い。

またＡ市の校内研修のいくつかの特徴として，一つの教科を学校で研究し続ける継続して行う研修と，GIGAタブレット等の使い方等１回のみ行う研修，対象者については全教員で行う研修と，若年層教員を対象に行う研修，活動形態としては一人の指導者が他を指導する活動，チームをつくりそれぞれに指導者が入るグループでの活動などがある。

研修内容としては，その学校の教員が実際の授業や教育活動で求める具体的なことが扱われることが多い。例えば若年層教員を対象とした校内研修では「体育の場づくりの研修をしたい」「"絵を描く会"のための研修をしたい」「理科の実験をどうしよう」という希望をもとに，教科指導の場合は教科主任または研修担当が計画をするという形態をとることが多い。

また校内研修の形式，回数は，学校独自に決められる。

４）図画工作の校内研修の内容や方法

図画工作の校内研修では，作品づくりの指導や実技の研修が中心となることが多い。近年の特徴として新たに導入された内容の研修等，新規に学ばなくてはいけないことは多くあり，既存の教科指導の研修に多くの時間を割くことの難しさ等を現場の声として聴くことが多い。

５．基礎調査

本研究の基礎調査となるアンケートは平成30年度に図画工作教育研究会（仮称）に所属する校長，教頭を対象に書類を配布し，久保田より調査を依頼実施したものである。

１）基本情報

⑴　実施年：平成30年９月頃を中心に実施

⑵　人数：119人

⑶　対象者：Ａ市内の小学校教員。校長または教頭が県の図画工作を研究する会に所属し，かつ図画工作専科のいない小学校７校のうち，図画工作の授業をもっている教師，講師。また学校の校内研究の教科が図画工作でない学校とした。

⑷　回収方法：学校で図画工作教育研究会に所属する校長や教頭が配布し回収後，メールボックスにて久保田が回収。

⑸　調査についての説明：各校の校長や教頭から記入者

に実施内容について説明。

⑹　許諾：本調査の依頼及び使用許可は図画工作教育研究会統括責任者より得ている。

２）調査目的

小学校教員の教科に対する意識の実態把握のためである。具体的には「教師の教科に対する研究の傾向や，教えることを得意，苦手と考えている教科を調査することで，他教科と図画工作の違いを比較する。」「美術館に行く頻度を調査することで，教師の鑑賞の傾向を知る。」「図画工作の作品を試作しているかを調査することで，教科の教材準備の傾向を知る。」「授業の困っている点を調査することで，教師の図画工作に対する困っていることの傾向をとらえる。」の４点で６つの質問を行っている。

３）Ａ市内の校内研究

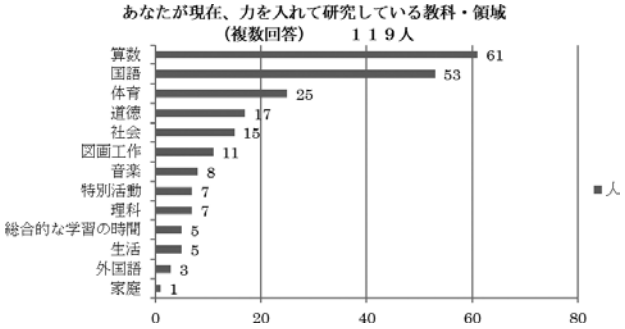
アンケート調査年のＡ市内の校内研究に関する調査報告（Ａ市教育センター）では，校内で年間を通して研究に取り組んでいる教科等（複数回答）を調査している。小学校112校（平成29年度より統廃合により111校）で最も校内研究対象の教科等で多い順に，国語41校，算数34校，体育17校，道徳16校，生活８校，教科全般７校，理科６校，総合的な学習の時間５校，社会４校，特別活動３校，外国語活動１校，家庭１校，図画工作１校，音楽０校である。

音楽は校内で年間を通して研究に取り組んでいる教科等では０校であるが，Ａ市は音楽専科が地域内ほとんどの学校に配置されている。なおＡ市においては図画工作科の専科教員は，ほぼ配置されていない。

４）設問ごとの調査結果及び分析

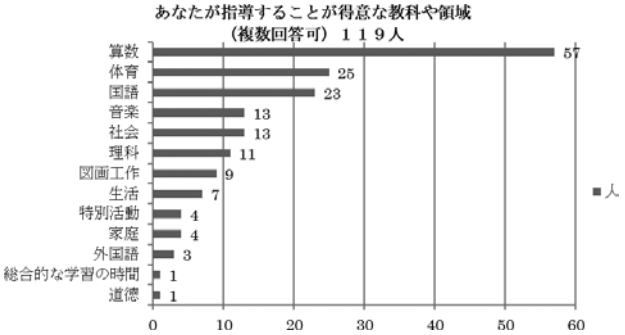
以下，設問とともに結果を図で示し，また合わせて分析を行う。

⑴　設問１　あなたは，現在，力を入れて研究している教科・領域はどの教科ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。（複数回答可）



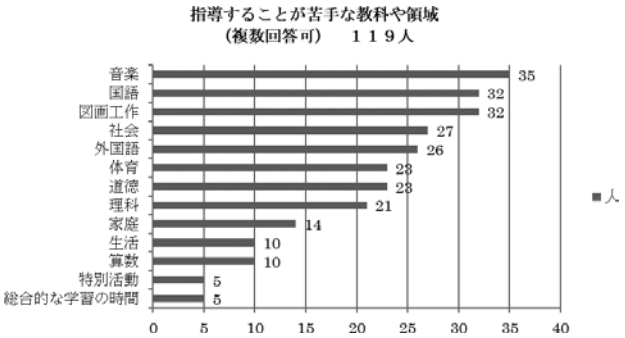
多い順に算数，国語，体育，道徳となっており，校内研究とほぼ同様の傾向である。調査対象校に図画工作の研究校はないが，独自に研究している教師は９％程度いることがわかる。

⑵　設問２　あなたが指導することが得意な教科や領域をあげてください。（複数回答可）



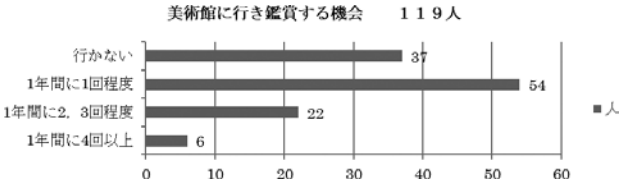
多い順に算数，体育，国語となっており，図画工作の指導を得意と回答した教員は約８％である。上位の教科はＡ市の校内研究の実施教科の多い順とほぼ同様の傾向である。

⑶　設問３　あなたが指導することが苦手な教科や領域をあげてください。（複数回答可）



多い順に音楽，国語，図画工作，社会，外国語，体育，道徳，理科となっている。図画工作は，約27％の教員が苦手な教科と挙げている。音楽は，Ａ市において音楽専科が配置されている場合も多く，指導経験が少ないこと，研究に取り組んだ経験が少ないことが要因と考えられる。

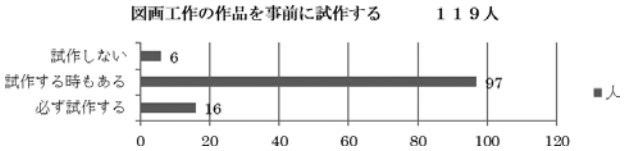
⑷　設問４　あなたは，美術館に行き，鑑賞する機会がありますか。あてはまるものに○をつけてください。



美術館に１年間に４回以上行く教師は６人であり，行かない教師は37人である。行かない教師は「興味のわくものが少ない」「魅力を感じない」が18人である。また，「知識がない」「きっかけがない」と答える教師が各２名おり，美術館に行く経験が少ない教師がいることがわかる。

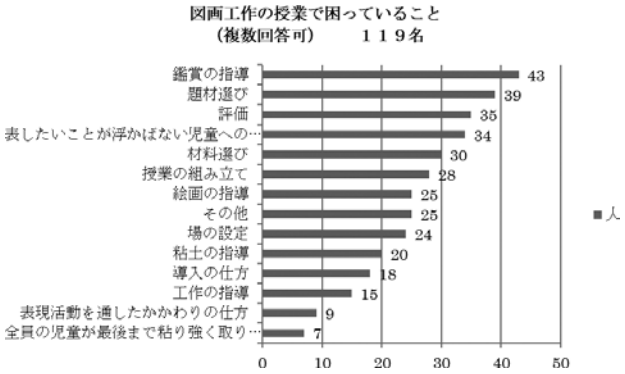
１年間に２回以上行く教師は，その理由を「美術館の雰囲気を味わう」「作品との出会いや作品と向き合うこと」をあげている。図画工作を教える教師の中で，美術館で作品と向き合うことに楽しみを見いだしている教師と，興味を持たない教師がいることがわかる。

⑸　設問５　あなたは児童が製作する図画工作の作品を事前に試作することはありますか。あてはまるものに○をつけてください。



必ず試作するという回答は13.4％，試作しない５％，試作する時もある81.5％である。図画工作の場合は，教員自身の教材理解のために児童に見せる見せないは別として試作を行うことが重要になるが，「試作しない」あるいは「試作する時もある」つまりしない時もあることにつながる回答が気になる。個別具体的な調査が必要かもしれない。

⑹　設問６　図画工作の授業で困っていることは，ありますか。あるものものすべてに○をつけてください。これ以外に困っているものがある場合は，その他の欄に記入してください。



自由記述（数字は人数）
〈絵の指導に関して困っていること〉
自分の絵に自信がない４／何が良い作品かわからない２／苦手意識２／指導の手順４／発達段階に応じての指導の仕方２／水彩画の指導方法４／構成・構図２／体の描き方１／その子らしさをどう伸ばすか１／パスと絵の具の使い分け１／立体の形が取れない子への指導方法１
〈工作の指導に関して困っていること〉
道具の安全な使い方３／自分自身がつくれない１／素材選び１／子どもの発想を生かしたいがより質の高い作品もつくらせたい１／発想の広げ方１
〈粘土の指導に関して困っていること〉
評価３／大きくつくれない子への指導２／表現力の伸ばし方１／何がよい作品かわからない１／金額が高い１
〈その他〉
個性を認めるべきかよい作品にするためにたくさん指導すべきか６／個人のよさを指導によりつぶしてしまうのではないか１／楽しく活動しているが技術の向上が難しい１／作品をあきらめる子，気持ちが続かなくなった子への指導２／時間の確保４／鑑賞の指導は文字ばかりを書かせてしまう。これでよいのか？１／評価に主観が入り正しい評価か不安１／題材をどうやって決めればよいのか１／自身の美的センス１／作品展等で賞に入らない１／材料集めの方法１／専門の先生に教えてもらえば作品が違ってくると思う１

ここでの調査では，「鑑賞の指導」，「題材選び」，「評価」が上位に挙がった。

自由記述は活動内容の記述が多く，鑑賞の指導については「文字ばかりを書かせてしまう」等，その教員自身の具体的な指導方法への困り感等が現れている。また題材については図画工作の場合は，オリジナルの活動を行うこともできる。教科書内の同じ活動内容のページでも方法や素材，アプローチ，作品とも多様な形で示され，教師が一部変えて実施することも，教科書自体を用いないことも可能である。ある意味では内容に教師自身のオリジナリティを発揮できるのではあるが，そのようなところも教師の題材選びに困るという回答にもつながるのだろうか。評価については「評価に主観が入り正しい評価か不安」と図画工作ではよく聞かれる視点での不安が上がっていた。活動や作品として現れ方が一様ではないことも，そのような不安につながる可能性もあるだろう。

自由記述からは「苦手意識」，「技能の指導の仕方」，「児童の個性と指導」，「鑑賞」，「評価」というキーワード浮かび上がる。

⑺　各設問と設問６の困り感とのつながりについて

設問２「図画工作を指導することが得意」と回答した教師が困っていると記述した箇所は，「子どもの発想を生かしたいがより質の高い作品もつくらせたい」という教師のねらいとのギャップ，「粘土の金額」という材料の準備について記載があった。設問３「図画工作を指導することが苦手」と回答した教師が共通して困っていることは，「自分の絵に自信がない」，「自分自身がつくれない」，「何がよい作品かわからない」「苦手意識」「指導の手順」「水彩画の指導方法」「道具の安全な使い方」等が挙げられるが，教師自身が持つ図画工作への苦手意識に起因したものが散見される。

５）基礎調査から

⑴　全体を通して

本調査を実施した時期のＡ市の背景や調査対象者より回収した回答から，いくつかのことがみえてくる。

「校内研究」という点においては，市内で１校のみが研究校であり，その意味では図画工作を校内で年間を通した研究，つまり継続的には取り組まれていないといえる。教員の日常での美術との接点ということでは，美術館に行く等，作品を鑑賞する習慣を持っていない教師のほうが，持っている教師の人数を上回ることが分かる。

授業準備に関しては，必ずしも毎回試作をするわけではなく授業準備にかける時間がない様子が垣間見られる。

教材研究の意識は高いとは言い難いとも言える箇所でもあるが，この点に関しては仕事時間の割合に比べて授業に関する時間に費やせない現状があることも見逃せな

いだろう。

⑵　まとめ

校内研修はより具体的に教員の希望をもとに計画されることが多いが，教員の個々の実態や背景によって，希望する研修内容の違いを意識する必要がある。

Ａ市内では図画工作を継続的に研究する基幹となる学校や，専科教員も少ないため，各校での教師の困り感や教科の情報等の対応には，校内研修が担う役割が大きくなるだろう。

６．個別調査

基礎調査から，Ａ市内での校内研修の重要性と，各教員の希望の違い等などをどのように研修に生かすことが可能かを考えるために，専科教員や特別に図画工作を研究してきた教員のいない１校（Ａ市立Ｃ小学校）を取り上げ，個別調査を行うことにした。

１）基本情報

⑴　実施年：令和３年８～９月を中心に実施

⑵　人数：Ａ市Ｃ小学校17人の常勤教諭・講師の内，15人から回答

⑶　回収方法：久保田による質問紙調査の配布及び説明，実施後回収

２）調査目的

基礎調査からは５年程度の開きがあり，その間に学習指導要領も改訂された。基礎調査と同じ項目の質問をすることで相違の比較検討をし，困り感の具体的なところの把握をしたい。

３）Ａ市立Ｃ小学校教員の研修経験の特徴

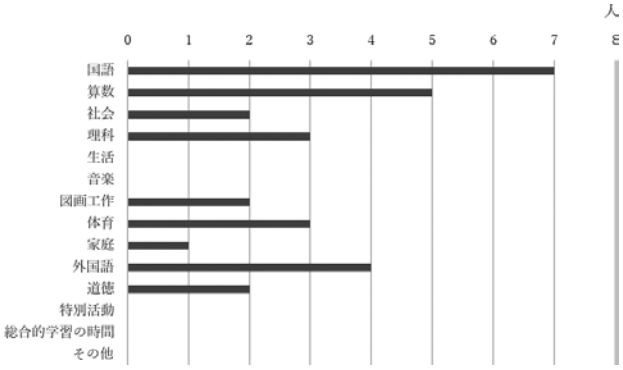
Ｃ小学校には専科はおらず，主任として各教科を担当する教員がいる。図画工作科については主任がおり特別教室の管理，作品展出品のとりまとめ等が主な役割である。

在籍教員は教員歴５年未満の若年層の教員が２割程度で，５年～15年の教員が半数という，若手の多い学校である。また60％が講師経験を経て正規採用になっている。図画工作の専科教員の経験をした教員はいない。

図画工作の研修を受けたことの「ある」教員は80％であり，研修の種類としては73％が校内研修，27％が自己研修，13％が校外研修である。研修の内容は実技が80％であり，ついで指導法の研修が53％，指導案検討が20％，市の教科研究会参加が６％であった。免許更新講習や免許認定講習で図画工作に関する科目を受講した経験は13％であった。Ｃ小学校の教員について，過去の図画工作に関する研修の経験については，主に校内研修が多く，内容は実技，ついで指導法が多いことが分かった。

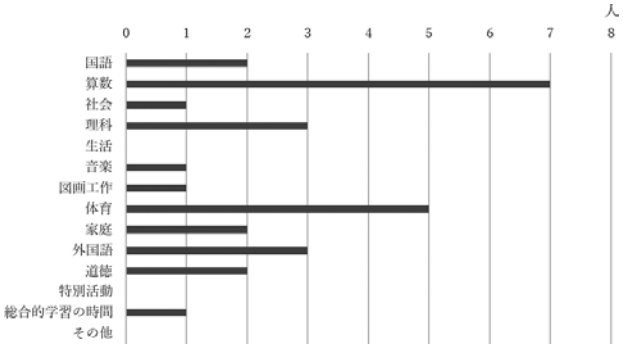
４）設問ごとの調査結果及び分析

⑴　設問１　あなたは，現在，力を入れて研究している教科・領域はどの教科ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。（複数回答可）



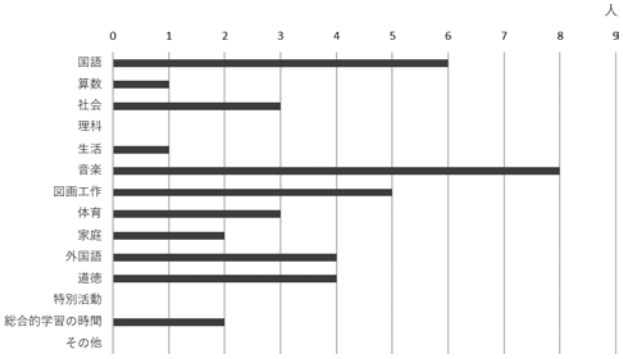
Ｃ小学校の2021年度からの校内研究は国語である。そのため国語が一番多いと考えられる。ついで算数，外国語，体育，理科の順である。基礎調査でも国語，算数，体育は上位であり，それほど相違はないが，個別調査でも外国語が入っていることは教科となったことも影響があるだろう。

⑵　設問２　あなたが指導することが得意な教科や領域をあげてください。（複数回答可）



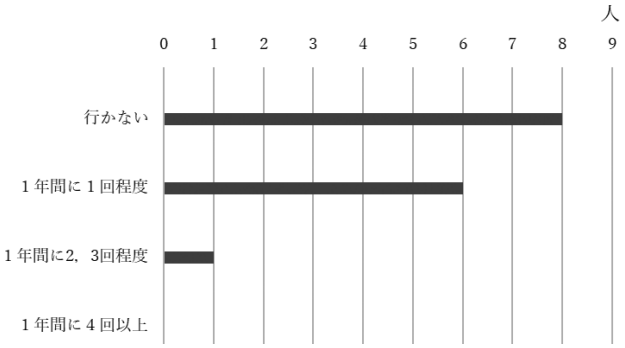
算数，体育，理科，外国語の順であるが，上位２教科は基礎調査と同じである。図画工作が得意と挙げている教員は１名である。それぞれの教科指導で「得意」と回答している教員についてみると，市の教科研究会所属や該当教科の中学校免許保持者であることが多かった。

⑶　設問３　あなたが指導することが苦手な教科や領域をあげてください。（複数回答可）



上位の音楽，国語，図画工作との回答は，基礎調査と同じでそれ以外もほぼ同様である。理科については苦手と回答している教員はいない。詳細を確認すると準備や相談にのることのできる管理職や支援員がいることが分かった。

⑷　設問４　あなたは，美術館に行き，鑑賞する機会がありますか。あてはまるものに○をつけてください。



半数以上が「行かない」と回答。回答ごとの詳細な様子は以下の通りである。

４―①美術館（美術展）のどのような点に魅力を感じていますか。数字は人数。

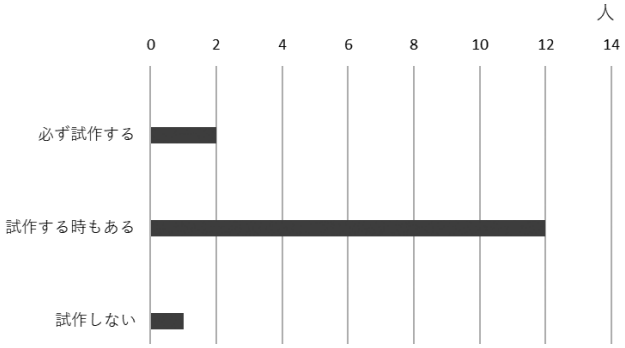
静かな空間で絵や作品を鑑賞することで，その世界に入ったような気持ちになる。１

４―②美術館に行かない理由をあげてください。

行く機会がない３／興味がない２／世界が違うという感じで考えたこと自体ない１／児童の作品とレベルがかけ離れている１／知識や感性が十分でないと思っており楽しめるとは思えない１

造形表現の方法は様々で鑑賞についても美術館だけが美術に触れる場ではないので，行かないことが，そのまま興味関心の低さにはつながらないだろうが，美術作品に触れたり，作品を意識して観たりする経験は少ないかもしれない。

⑸　設問５　あなたは児童が製作する図画工作の作品を事前に試作することはありますか。あてはまるものに○をつけてください。



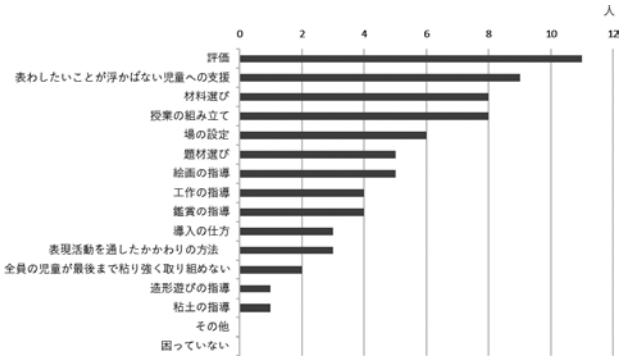
「必ず試作する」約13%　「しない」約６％　「試作する時もある」80%で基礎調査も個別調査もほぼ同じ割合であった。試作をしないことと指導の苦手意識がつながるかについて調査が必要だろう。

⑹　設問６　小学校の図画工作の活動の中で，子どもたちにどのような力が育ってほしいと思いますか。（自由回答）数字は人数。

豊かな発想力４／表現するための技能４／作品をつくる楽しさを味わう４／豊かな表現力３／自分の作品に自信を持ってほしい３／友達の作品の良いところを見つける力２／粘り強く仕上げる力１／試しながらより良い表現方法を探ること１／夢中になって取り組む力１／色彩豊かな着色を楽しむ力１

本調査で初めて設定した項目である。発想力や技能が言葉として上位に表れている。これまでよく見られた技術指導に関する言葉よりは資質・能力に関連する言葉が満遍なく現れている。このことは困っていることや希望する研修内容との関係があるかもしれない。

⑺　設問７　図画工作の授業で困っていることは，ありますか。あるものものすべてに○をつけてください。これ以外に困っているものがある場合は，その他の欄に記入してください。



「評価」「表したいことが浮かばない児童への支援」「材料選び」「授業の組み立て」と続く。「評価」が最上位にあること，他の上位にあるものも基礎調査の上位項目とは異なる。

個別調査では，指導方法というよりは，育ってほしい力と関連する評価や授業の組み立て，また発想等の創造に関する根幹にかかわる箇所についての選択が多い。

（困っていることはありますか：指導の箇所に自由記述の枠）数字は人数。

<u>絵画の指導</u> 指導法，どこから描くか等２／人物を描かせるポイント１／児童が描きたいものと題材とのズレ１／児童が納得できる作品づくりをさせる方法１ <u>工作の指導</u> 技能を高める時間がとりにくい１／自由に材料を持ってくる場合の評価１／工夫のない子へ真似を進

めることが良いのか１／児童が納得できる作品づくりをさせる方法１
鑑賞の指導
指導したことが実態に合っていたか１／どのような点に注目させたらよいか１／思いを持たせるための働きかけ１
造形遊びの指導
何を目的にするのかわかりにくい１
粘土の指導
児童が納得できる作品づくりをさせる方法１

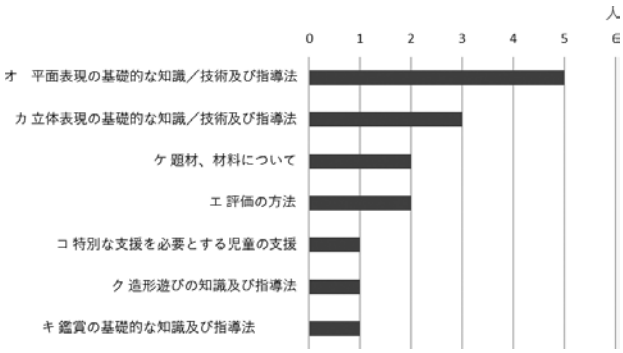
Ａ市では合同の児童作品展があり多くは絵を出品することが多い。そのような影響もあるのか絵に関する記述が多くみられた。また具体的な事柄が多くみられる。

⑻　設問８　図画工作の校内研修として取り組むとしたら，何を取り組みたいですか。下の□から選び，記号で答え，理由を書いてください。取り組みたい順番に選んでください。

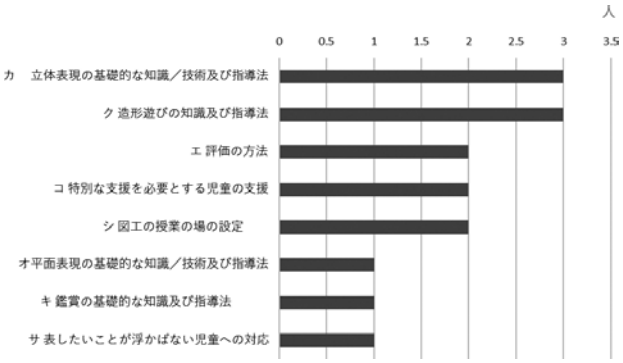
選択肢

ア　図画工作科の目標と内容の関連について
イ　図画工作科の三つ柱について
ウ　他教科・行事等との関連
エ　評価の方法
オ　平面表現の基礎的な知識／技術及び指導法
カ　立体表現の基礎的な知識／技術及び指導法
キ　鑑賞の基礎的な知識及び指導法
ク　造形遊びの知識及び指導法
ケ　題材，材料について
コ　特別な支援を必要とする児童の支援
サ　表したいことが浮かばない児童への対応
シ　図工の授業の場の設定
ス　指導案の書き方について
セ　その他
ソ　希望はない

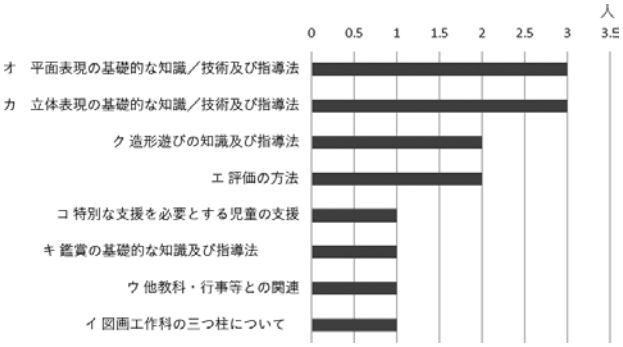
①選択肢からの回答
１番目に記述



２番目に記述



３番目に記述



困っている記述の箇所で一番回答が多かった絵画の領域は「平面表現の基礎的な知識／技術及び指導法」に入る。それを取り組みたい順番では１番目に希望する教員が多いことがわかる。「立体表現の基礎的な知識／技術及び指導法」「造形遊びの知識及び指導法」も上位に，ついで「評価の方法」も多くみられる。

②理由の記述

具体的な理由は以下の通りである。①～③は取り組みたい順番であり，そこで書かれた内容である。数字は人数である。

ア図画工作科の目標と内容の関連について／記述なし
イ図画工作科の三つの柱について

③基本がわからない１

ウ他教科・行事等との関連

③「うれしい」「くやしい」「わくわくした」等の表現ができたらよいと思う１

エ評価の方法

①評価の方法を知りたい１／毎年評価のことで悩んでいる１　②評価の方法を知りたい２　③作品の見方を知りたい１／鑑賞を含めた評価の方法１

オ「平面表現の基礎的な知識／技術及び指導法」

①技術や指導法を学びたい３／個人差が大きく苦手意識を持つ子が多いから２　②技術や指導法を学びたい１　③技術や指導法を学びたい３

カ「立体表現の基礎的な知識／技術及び指導法」

①技術や指導法を学びたい３　②児童の技術を高めたい１／自身に苦手意識がある１／技術や指導法を学びたい１　③基礎から学び直したい１／技術や指導法を学びたい１

キ鑑賞の基礎的な知識及び指導方法

①指導法を学びたい１　②どのように思いを持たせ広げていくかが難しい１　③指導に迷いがある１

ク造形遊びの知識及び指導方法

①造形遊びの知識が全くないから１
②造形遊びの知識がないから２／充実した学習内容にするため１
③自由に思ったことを表現させたい１／造形遊びの知識がないから１

ケ題材，材料について

①実態に応じて提示できるようにするため１／教科書以外の題材が浮かばないから１

コ特別な支援を必要とする児童の支援

①特別支援の担任だから１　②苦手意識のある児童への指導，支援の仕方１／学級の中で生かしていきたい１　③苦手意識のある児童への指導，支援の仕方１／学級の中で生かしていきたい１

サ表したいことが浮かばない

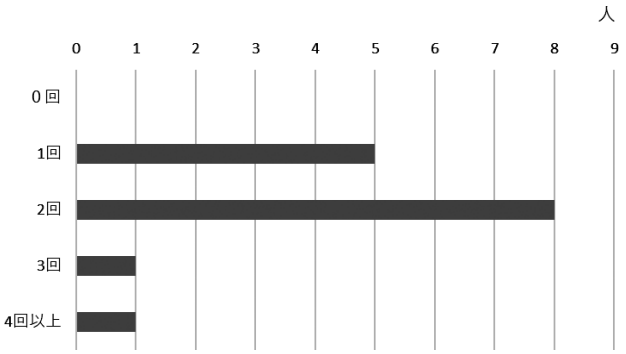
②自分にアイデアがなくいつも手助けに困ってしまう１

シ図工の授業の場の設定

②最後まで意欲的に取り組ませるためには場づくりが重要だと思うから２

技術や指導法，知識を学びたい，授業をする中で教師自身が感じている児童への具体的な直接的，間接的な支援方法を知りたいということが理由からみえてくる。教師自身が困っている箇所と校内研修内容の希望が必ずしも強い相関関係があるとは言い切れないが，具体的な児童の事例や教師自身の必要性をもとに希望を書いていることがわかる。

⑼　設問９　１年間の研修の中で，図画工作の研修は何回必要だと思いますか。１つに○をつけ，理由を書いてください。

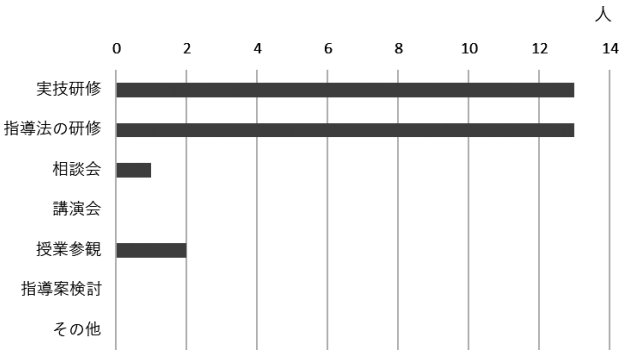


理由は以下の通りである。数字は人数。

〈１回と回答〉
絵を描く会に向けて１／時間があればたくさん受けたいが現実的に考えて（他教科との兼ね合い）２／時間がない１
〈２回と回答〉
絵を描く会と児童作品展に向けて３／絵画，工作で一回ずつ２／前期と後期に実施した方がいい１／評価と技術的な研修１
〈３回と回答〉
１回だけでは興味関心で終わってしまうので３回行い身につけたい１
〈４回以上と回答〉
図工の授業が苦手だから１

児童作品展等の行事に合わせたり，内容別，研修の形態・方法別，単発ではなく継続的にという希望も見られる。回数の多い回答としては「身につけたい」という意識があることがわかる。

⑽　設問10　どのような内容や方法を用いた研修をしたいですか（いくつでも）。



実技や指導法といった具体的な内容の希望が見られる。

実際に表現材料に触れて表していったり，実際の作品をみたりという，具体的に実践する活動が希望としては高いことがわかる。また指導法についても，実技と同数ということも併せて考えると，単に個人が表現するだけ

の研修ではなく，そこにはどのような意味がありどのような手立てを講じることができるかというところまでを求めている表れとも言えるのではないだろうか。

また図画工作は児童個別の支援を中心に進めていくことが多い。そのため具体的に調査を進めると個に合わせた指導法の希望等もみえてくるかもしれない。

5）個別調査から

⑴　全体を通して

個別調査においても基礎調査と同様の傾向があるものもあれば，学校独自の傾向もあることが見える。校内研修の内容希望については，目の前の実際の児童をイメージしながら回答していることが伺われる。また研修を通して「身に着けたい」という意識が感じられる。

⑵　まとめ

学校を抽出し個別調査を行うことで，教員の背景や個人の持つ専門性，また経験や年齢層，現在抱えている困り感も様々であることがみえてきた。どこかに大きな偏りがないということが特徴の一つともいえるだろう。また日々の授業や児童を想定して内容も具体的に記述されている。

そのようなことからも校内研修については，計画者は各教員の実態把握や希望の聴取，学校や児童の実態をふまえ，その内容や方法，形態についてもこれまでの方法や前例等にとらわれることなく提案していくことも重要ではないだろうか。

7．まとめ

今回は２つの調査報告を行った。図画工作については，指導を苦手と感じる教員が多いが，授業のための試作をする等の授業準備が必ずしも万全とはいえない状況も見えてきた。図画工作については教師自身が造形表現に対して自信がないこと，授業の際の評価の視点などの不安もみられる。

教師自身が図画工作について何らかの情報を得ようとする場合，どのような情報源や選択肢があるかは今後調査する必要があるが，校内研修は図画工作科という教科にとっては具体的な情報を得るために必要な場所になっているのではないかと考えられる。

校内で研修することは，目の前の子どもの実態に沿って考えることができるばかりではなく，学年内外の同僚と行った内容を共有したり試行したり，相談することもできる。大多数の平均的な希望内容を実施するのではなく，その学校にあったものを取り上げることができるだろう。

教科の指導についての校内研修は，担任がほとんどの教科にかかわる小学校ならではのものといえる。テーマ設定によっては現代的な教育課題や他教科との連携等，教科内容のみで終わらない研修も可能かもしれない。

教員の学び続ける機会を保障するためには，自治体が学校の方針，教員個人の背景や年代ごとの研修や，おかれている立場や役割，所属する研究会等も含め複合的に考えていく必要がある。また学ぶことでの教師の変容についても検討する必要があるだろう。今回はその点に関して掘り下げて調査をすることができなかったため，インタビュー等での個人調査や抽出した学校での実践を行うことも考えられる。今回の結果を受けてどのような校内研修を行うことができるか継続し検討していきたい。

注

１）文部科学省まとめ「OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2018報告書―学び続ける教員と校長―のポイント」，https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418199_2.pdf，令和元年６月（最終閲覧日2021.10.29）

２）同上，p. 3

３）同上，p. 4

４）同上，p. 4，表４

５）同上，p. 4，表５

６）同上，p. 5，表６

７）文部科学省・国立教育政策研究所「OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2018報告書vol. 2のポイント」https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/__icsFiles/afieldfile/2020/20200323_mxt_kouhou02_1349189_vol2.pdf，令和２年３月23日（最終閲覧日2021.10.29.）

８）同上，p. 1（注１）

９）同上，p. 1

10）同上，p. 7

11）教育基本法第二章　教育の実施に関する基本（教員）第九条　法律に定める学校の教員は，自己の崇高な使命を深く自覚し，絶えず研究と修養に励み，その職責の遂行に努めなければならない。

２　前項の教員については，その使命と職責の重要性にかんがみ，その身分は尊重され，待遇の適正が期せられるとともに，養成と研修の充実が図られなければならない。

12）教育公務員特例法（昭和二十四年法律第一号）（抄）第二十一条　教育公務員は，その職責を遂行するために，絶えず研究と修養に努めなければならない。

２　教育公務員の任命権者は，教育公務員の研修について，それに要する施設，研修を奨励するための方途その他研修に関する計画を樹立し，その実施に努めなければならない。

13）独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き2018―効果的な運営のための知識・技術―」平成30年，pp. 2-3

14）同上，p. 3

15）同上，p. 6

16）久保田美和「人材育成をとおした組織力向上における教頭の役割～OJTを通じて日常的に学び合う校内研修を目指して」第61回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会及び第59回群馬県公立学校教頭会研究大会群馬大会要項　研究課題「組織・運営に関する課題」，令和２年度，pp. 74-77